

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
しー1	傷寒論・金匱要略条文 四逆散	読み および解説・その他 甘草 (甘平)・ 枳実 (苦寒)・ 柴胡 (苦平)・ 芍薬 (苦平) 各 2.5g 等分 上の4味を各 2.5g を搗いて篩い、米のおも湯にて1回に2g を1日3回服用する。
弁少陰病脈証併治第十一第 38 条 (傷寒論)		
「少陰病、四逆、其の人或は咳し、或は悸し、或は小便利せず、或は腹中痛み、或は泄痢下重する者は 四逆散 之を 主 る。」		
<p>解説 少陰病で、手足の先の方から冷えて (寒が熱に変じた状態を考える必要があり、中焦に熱を持っている)、脈が触れにくいもので、或いは咳をしたり、或いは動悸や胸さわぎをしたり、或る場合には小便の出が悪かったり、或いは腹中が痛んだり、或いは大便が少しずつ下って出にくい様なものは四逆散が主治する。</p>		
<p>肝は疏泄を主り、肝気は体全体を順調に流れて、臓腑の働きを活発にしている。ところが、ストレスのために肝気の疏泄障害が起こり、気滞陽鬱して鬱熱を伴うが、少陰心の陽気が抑制されて、四肢末端への陽気の流れが悪いので四肢厥冷になる。この場合の四肢厥冷は、手足の末端に軽く見られる程度である。また同時に、肝気の疏泄障害により肝気が上逆して、ため息が出たり、胸悶が生じ、また、脾胃に影響して口苦、悪心、食欲不振、ゲップ、腹張、腹痛、下痢が生じる。この場合の下痢はひどくは無く、便秘と下痢が交互に来ることもある。また、肝気の流れが悪いために胸脇苦満、心下痞を起し、更に気鬱のため憂鬱、イライラも発生する。この様に少陰心の陽気が抑制されたものは、陽虚では無いので、軽い四肢厥冷はあっても裏寒証の悪寒、ひどい下痢、強い四肢厥冷は見られない、この様な場合、四逆散で鬱滞した陽気を暢達し、気血の循環を調整する。</p>		
<p>四逆散の加減方</p>		
<p>肺寒気逆を伴って咳する場合は、 四逆散 1 劑 6g + 五味子・乾姜 各 1.2g とする。この方は合わせて下痢をも治す。</p>		
<p>心陽不振を伴って動悸する者には、 四逆散 + 桂枝 1.5g を加えて、1回 2g の服用とする。</p>		
<p>水が下焦に停滞して、小便の出が悪い者には、 四逆散 + 茯苓 1.225g を加えて、1回 2g の服用とする。</p>		
<p>寒が裏に盛んなるために、腹中が痛む者には、 四逆散 + 附子 0.2g を加えて、1回 2g の服用とする。</p>		
<p>寒気鬱滞して、しぶり腹の止まない者には、 四逆散 + 薤白 10g</p>		
<p>まず水 200ml を以って薤白 10g を煮て 120ml を取り、滓を去り四逆散 6g を湯の中に入れ、更に煮て 60ml とし、これを 2 回に分けて服用する。</p>		
<p>四逆散証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「手足冷え、或ひは咳が出て、或ひは動悸し、或ひは小便利し、或ひは腹中痛み、或ひは腹下りてしぶる者、熱は有るものもあり、無きものもあり、しかし大概は芯に熱あるものなり。また胸中の煩満、心下の痞え等の証を兼ねることもあり。」と記されている。</p>		